広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	呪われた女美容師たち : オスティア出土呪詛板の研究
Author(s)	前野, 弘志
Citation	史学研究 , 313 : 16 - 37
Issue Date	2022-09-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00055728
Right	
Relation	

呪われた女美容師たち
―オスティア出土呪詛板の研究―

前 野　弘 志

はじめに

ローマ市の外港都市オスティアからは、管見の限り、現在までに４枚の呪詛板が出土している。小論ではこれらのうちローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスにある墓所 A2-I から1910年に出土した呪詛板を中心に考察する。これは縦10.5cm 横10.5cm の鉛の板であり、真ん中で縦に折られて閉じられた状態で発見された。開けると内面に９人の呪詛の標的（ターゲット、つまり被呪詛者）の名前が刻まれていた。名前は１行ごとほぼ一律に、標的の名前、女主人の名前、女奴隷 *ser*(*va*)、女美容師 *ornatrix* の順に書かれ、呪文や呪詛の理由などは一切書かれていない。この呪詛板に関する研究は少なく、これまで家名に着目した研究や同職組合に着目した研究はあるが、彼女たちを呪詛した人物の心の内を扱った研究は見当たらない。そこで小論では、この呪詛板を手がかりとして、古代ローマ時代の庶民の声無き声に耳を澄ませてみたい[(1)]。

仮称	呪詛板情報
TDO.1	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A2-I） 発見年：1910 年 保管場所：不明（失われた） 標的：9 人の女美容師たち 年代：前 75-50 年より後 言語：ラテン語
TDO.2	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A2-II） 発見年：1910-1912 年 保管場所：不明 標的：不明 年代：後 14-37 年以降 言語：不明（開かれたが解読されず）
TDO.3	発見場所：ローマ門ネクロポリス（墓所 A18a） 発見年：1954 年 保管場所：オスティア新保管所 (inv. 17044) 標的：約 30 人の女性たちと男性たち／釘付き 年代：後 2 世紀後半以降 言語：ラテン語
TDO.4	発見場所：消防隊宿舎の中（階段 5 の下の墓） 発見年：1911-1912 年 保管場所：不明 標的：不明／釘付き 年代：後 3 世紀後半よりずっと後 言語：不明（おそらく開かれずじまい）

表１：オスティア出土呪詛板の一覧

１．オスティア出土呪詛板の概要

オスティア出土呪詛板をここでは *TDO*（*Tabula Defixionis Ostiensis*）と仮称し、年代の古い順に番号を振って並べ、呪詛板情報を一覧した（表１）[(2)]。

１－１．*TDO*.１：

これは表題の呪詛板であり、後に詳しく論じるので、ここでは触れない。

１－２．*TDO*.２：

これは Vaglieri が1910-1913年にかけてローマ門ネクロポリスを調査した際に発見された呪詛板である。1912年の彼の報告書によれば「細工された骨が近ごろ再び発見された墓のそばで、茶色いニスが塗られた三つの小さな壺と多くの断片に分かれた鉛の薄板がまとまって発見された。その碑文は読むのが困難なので別の機会に報告しよう。これは明らかに一つの呪詛板 una *tabula defixionis* である」とある[(3)]。オスティアの遺跡は1938-1942年にかけて大々的に発掘され、報告書は戦後になってようやく出版されたが、その一つ *Scavi di Ostia* III-1［1958］は、それまでに発掘された全ての墓所に番号を振り、*TDO*.2が発見された場所を「この墓のそば」Presso questa tomba と記すのみで墓所番号を明記していないが、文脈から考えて墓所２（前１世紀中頃）のそばを指すと読める[(4)]。またその場所からの出土物について、上記の Vaglieri の報告書を引用しつつ、茶色のニスが塗られた三つの小さな壺、象牙の副葬品、おそらく一つの呪詛板 una *tabula defixonis* の残存と思われる鉛の薄板の断片をあげている[(5)]。しかしこの呪詛板に関する新しい情報はない。

記述の順序が前後したが、実は表題の呪詛板 *TDO*.1が発見された墓は *Scavi di Ostia* III-1［1958］における墓所１（前１世紀前半）の中であり、墓所１の後ろの壁と接して墓所２が位置する[(6)]。「墓所１の後ろの壁に接続して、もう一つ別の墓所（墓所２）があり、（それは）部分的に西 occidentale の側壁が見られるグリッドの中にあり、それ（西の側壁）は墓所１のそれ（西の側壁）に続く」[(7)]。そもそもどの視点に立つかによって東西南北は変わってくるので表記が難しいが、*Scavi di Ostia* III-1［1958］の二つの図版を参考にしつつ[(8)]、上記の引用文に従えば、墓所１から墓所２に連続して伸びる西壁を基準とするならば、墓所１と墓所２を隔てる壁は、西壁と直角につながっているので、墓所１から見れば南壁（後ろの壁、なぜならば墓所１の玄関はオスティア街道に向かって開いていたから）となり、墓所２から見れば北壁となる。しかし墓所１と墓所２の軸線（西壁）は南北ではなく、北西から南東へ伸びているので、南北より西に45度傾いていることになる。従って墓所１を北とすれば、墓所２は東に位置すると表現した方がより正確であると思う。

墓所２からの出土物として、陶製の土器と青銅の一片がそれぞれ入った二つの骨

壺と潰れた一つの骨壺が報告されているが、呪詛板は言及されていないので[9]、呪詛板が発見された場所は墓所２の中ではないことが分かる。上述したように「この墓のそば」とは墓所２のそばを指すと読める一方、その同じ墓を指しているはずの「細工された骨 ossi lavorati が近ごろ再び発見された墓のそば」（Vaglieri［1912］p.22）がどの墓を指すのかは判然としない。というのも Vaglieri のこの文章には（*Notizie*, 1911, pag.248）いう註があり、この墓を明確に同定しているはずなのに、当該箇所を見るとオスティアではなくトレヴィニャーノ・ローマーノのことが書かれており、細工された骨についても報告がない。同巻でオスティア出土の細工された骨が報告されているのは p.43である。そこにはヘルモゲネスの墓（後述）の下には、共和政期の円形の墓があり（おそらく *Scavi di Ostia* III-1［1958］の墓所３のこと）、その後ろに墓所の痕跡が確認され（おそらく *Scavi di Ostia* III-1［1958］の地点 E のこと）、「ここにも同様な細工された骨 ossi lavorati が集中して発見され、それらの内の一つは女性の頭が美しく表現されている」と書かれている。*Scavi di Ostia* III-1［1958］にも、地点 E で出土したものとして、女性の頭を表現した三つの細工された骨 ossi lavorati のことが述べられているので、両者の記述は一致している。つまり *Notizie*, 1911, pag.248は *Notizie*, 1911, pag.43の誤植だったのだろう。そうだとすると、「細工された骨が近ごろ再び発見された墓のそば」とは墓所２のそばにある地点 E を指していると考えて間違いない。従って *TDO*.2の発見場所は、墓所２のそば、かつ地点 E のそば、ということになる。

では「細工された骨が近ごろ recentemente 再び発見された ha ridato」とあるので、*TDO*.2の発見の少し前に、同様に細工された骨 ossi lavorati が発見された墓があるはずであるが、それはどの墓所だろうか。後述するように、*TDO*.1が発見された墓所 A2-I からも細工された骨の断片が発見されており、墓所 A2-I と墓所 A2-II は隣接しているので、先に細工された骨が出土した墓とは、どうやら墓所 A2-I のことを指しているようである。

Scavi di Ostia III-1［1958］は、互いに隣接する北の墓所１（前１世紀前半）と東の墓所２（前１世紀中頃）を二つ墓所として区別して登録したが、オスティアのローマ門ネクロポリスとラウレンティウム街道ネクロポリスに関するそれまでの膨大な研究の包括的な編集を目指した Heinzelmann［2000］は、両者を一つの墓所 A2として登録し、その代わりに時代相で二つに区別して、北の古い施設を I 期（前１世紀の第二四半世紀から中頃、つまり前75-50年）、東の新しい施設を II 期（ティベリウス帝期、在位：後14-37年、つまり後１世紀前半）とした[10]。

Heinzelmann［2000］の A2の II 期の解説には、もはや *TDO*.2の記述が見られなくなっている。Vaglieri はどうやらこの呪詛板を解読できず、報告されずじまいになったようである。保管場所についても記述が見当たらない。従って、これ以上この呪詛板について議論することは不可能である。

1－3. *TDO*.3：

これは1954年にローマ門ネクロポリスから出土した呪詛板である[11]。この呪詛板の初出文献は Solin［1968］である。この本が出版された時点で、オスティアから出土した呪詛板は *TDO*.1と *TDO*.2のみと明記されている[12]。このローマ門ネクロポリスから発見された第三の呪詛板の発見場所は、*Scavi di Ostia* III-1［1958］の番号に従えば墓所11、Heinzelmann［2000］の番号に従えば A18a である。この墓所は *TDO*.1が発見された地点（墓所１＝墓所 A2-I）と同じ並びにあり、そこから北北東に向けて約87m 離れた場所、つまりローマ門からは約105m 離れた場所にある[13]。この墓所はそれ以前 Vaglieri によっても Squarciapino によっても調査されたにもかかわらず呪詛板に関する報告がなかったので[14]、彼らはそれを見落としたようである[15]。というのも「それ（この呪詛板）は、あるカプチン墓、つまり貧民のための墓の中にあり、屋根の形に組まれた屋根瓦に覆われていた・・・このカプチン墓は撹乱されていたように思われる、つまりこの墓は陥没し、そのことによって呪詛板が中に紛れ込んでしまっていた可能性がある」からである[16]。この呪詛板は２世紀、早くとも２世紀後半あるいはそれ以後に年代づけられる[17]。

この横長の長方形の呪詛板には表裏両面にラテン語でテキストが刻まれ、大きさは幅0.235m 高0.11m 厚0.002m で、縦の六つの断裂線によって七つの断片に分かれている[18]。巻かれた状態で発見された時には、この呪詛板から飛び出している棒状の金属が確認されたが、これは釘と考えられ、一般的に行われるように呪詛板を貫通させたものではなく、おそらく呪詛板が折り畳まれる前に釘を包み込んだか、あるいは折り畳まれた後に釘を差し込んだものと考えられる（釘は今では失われている）[19]。

テキストの解読は呪詛板の保存状態が悪いためかなり困難であるが、分かることは、テキストは外面から始まり、まず標的を神霊に引き渡す定型文が書かれ、残りの判読可能な部分はほとんど標的の人名であり、[lig]o「私は縛る」（外面１行）、peri(ant)（=pereant）「彼女らが死にますように」（外面５行）、ocida(nt)（=occidant）「彼女らが破滅しますように」（外面６行）、tabes(cant)「彼女らが衰弱しますように」（外面９行）など呪いの定型句も見られ[20]、内面は三つのコラムに分けて書かれた人名のみで、これは外面で書き切れなかった標的の人名を書き続けたものである[21]。

呪詛の理由は不明であるが、呪詛の標的は約30名、大多数は女性で男性も４名おり（女性の多くは自由市民 Freie、男性はみな奴隷 Sklaven で彼女らの従僕 Diener）、Solin は一人の恋敵による恋愛呪詛であるように見えると推測している[22]。Solin［1968］に続く本格的な研究はなく、その研究成果を Descoeudres［2001］や Karivieri［2020］が踏襲して簡潔にまとめ、不明瞭な小さな写真を添えているだけである[23]。それにしても一人の女性が一人の男性をめぐって30人近くの恋敵を呪ったとしたら、その男性はどれだけ男前だったのだろうか !? という疑問は残るが、

テキストの残存状況からして、これ以上の探究は望みが薄い。

1－4. *TDO*.4：

これは消防隊宿舎で Vaglieri が発見した呪詛板である。彼の1912年の報告書によると、消防隊宿舎の北側 Sul lato settentrionale、北東角 l'angolo nord-est の階段下の空間で土葬された二つの墓が発見され、その墓標としてそれぞれ１枚の瓦と遊戯用テーブルが再利用されていたが、「これらの墓の一つの中に、一つの呪詛板 una *tabula defixionis* があり、それは手紙の封筒のように折られ、釘が打ち付けられていた。それを無傷に保ったまま開けることは不可能な状態であった」とある[24]。

消防隊宿舎の位置と年代について、オスティアに関する学術的なヴェブサイト Ostia Habour City of Ancient Rome に従って、以下にまとめた[25]。消防隊宿舎 Caserma dei Vigili は Regio II - Insula 5に区画される。消防隊宿舎の発掘は Vaglieri によって1911-1912年にかけて完了された。現在見られる遺構は、ハドリアヌス帝治世末期の132-137年に建設された。正面玄関は東側 east side に向かって消防隊通りに開いている。正面玄関から敷地に入ると奥に伸びる長方形の中庭があり、その奥に皇帝神殿 Augusteum があり、そこでの最後の奉納物はゴルディアヌス３世（治世：238-244年）とその妃に対して捧げられたものであるので、244年にそこでの皇帝礼拝が終わったと見られる。中庭と皇帝神殿を取り囲むように敷地の外壁に沿って多数の小部屋が並んでおり、二階に上がる階段が四つある。この建物の最も新しい部分は北東角のわずかな部分（fig.4の緑色の部分）であり、年代は第 IV 期の250年以降である。従って３世紀後半には消防隊はこの宿舎を去ったと思われるが[26]、この建物で発見された最も新しいコインは355-363年のものであり、北東側 north-east の部屋52-54（第 IV 期の建て回し部分）では小さな竈が備え付けられており、また同じく北側隅の階段５の下の空間では後の時代の二つの墓が発見されている[27]。

つまり北側隅の階段５の下の空間が *TDO*.4の発見場所であると判明した。しかし呪詛板の年代については特定できない。常識的に考えて、消防団員が住んでいる宿舎の階段下に墓を作ることはあり得ないので、この墓は消防隊宿舎が放棄された３世紀後半よりもずっと後の時代とするのが妥当だろう。またこの呪詛板に Solin [1968]が言及しなかったことからすると、どうやらこの呪詛板も開かれずじまいで、所在不明になったようである。従ってこの呪詛板についても、これ以上の考察は断念せざるを得ない。

*　　*　　*

以上、管見の限り知り得た４枚のオスティア出土呪詛板のうち、*TDO*.2と *TDO*.4は報告もなく所在不明、*TDO*.3は詳細な研究はあるものの断片すぎてこれ以上の探究は困難、残る *TDO*.1は、今では所在不明となっているとはいえ、精密なスケッチ

が残されており、テキストもほぼ問題なく読めるので、以下ではこの呪詛板についてのみ再考を試みる。

２．発見場所

冒頭で述べたように、*TDO*.1はオスティアのローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスの墓所 A2-I で発見された。それらの位置と歴史について概観することは、同呪詛板の年代を決定する上で不可欠な作業である。

２－１．ローマ門ネクロポリスの位置：

この公共墓地は、辺 A：ローマのオスティア門から出てオスティアのローマ門に至るオスティア街道、辺 B：この街道から途中で枝別れて並行に走りオスティアのセコンダリア門に至る墓地通り、辺 C：ローマ門とセコンダリア門の間の市壁、これら辺 A・辺 B・辺 C によって囲まれた鉛筆型の細長い区画である。ローマから陸路でオスティアに向かう旅人たちは、陸の玄関へと誘うアプローチをなすこの墓域を横目に眺めらがら、門をくぐって市内に入って行った[28]。

２－２．ローマ門ネクロポリスの歴史：

ローマ門ネクロポリスの歴史は、以下、八つの要素の組み合わせによって説明される。［1］市壁:オスティアに市壁が築かれた時期は、前100-50年頃である[29]。［2］ローマ門：市壁にローマ門が設置された時期は、かつては市壁の建設との関連においてスッラ時代の前100-75年頃とされたが、近年の調査によって前75-50年頃に修正された。これがローマ門の考古学的な第 I 期であり、第 II 期はドミティアヌス帝期（在位：81-96年）ないしトラヤヌス帝期（在位：98-117年）の後100年頃とされる（第 II 期については後述）[30]。［3］オスティア街道：ローマ門に入る手前のオスティア街道は考古学的に５期に区分される。第 I 期は市壁およびローマ門の建設と同時期の前75-50年頃、まだ砂利道で、レベルは0.80-0.90m であった。第 II 期はアウグストゥス帝期（在位：前27－後14年）後半からティベリウス帝期（在位：14-37年）、レベルが1.50m に嵩上げされた。これは後15年に起こったと文献に記録されているティベリス川の氾濫と関係があるのかもしれない。第 III 期はクラウディウス帝期（在位：41-54年）、レベルが1.60m に嵩上げされた。第 IV 期はトラヤヌス帝期（在位：98-117年）、レベルが2.00-2.20m にさらに嵩上げされた。またこの時はじめて舗装道路となり、これに応じてローマ門も刷新されて、100年頃に大理石の化粧板で覆われた（ローマ門の第 II 期）。この状態が２世紀いっぱい続いた後、第 V 期はセウェルス帝期（在位:193-211年）、この時に新しい舗装と取り替えられ、これが今日見られる路面である[31]。［4］ローマ門ネクロポリス：ローマ門ネクロ

ポリスは考古学的に４期に区分される。第 I 期は共和政末期の前２－１世紀、まだ墓所も少なく閑散としていた。第 II 期は初期帝政期、墓域がオスティア街道の南南東側に沿って２列になって並び始めた。第 III 期は後２世紀前半、墓域が密になった。第 IV 期は２世紀後半から３世紀、墓域がさらに密になった[32]。[5] 墓地通り：この公共墓地を挟んでオスティア街道と反対側には、明らかにセコンダリア門の設置以前、既に舗装されていない道が存在していた。この道はこの公共墓地における２列目の墓所の並びが発生してはじめて敷設されものである。その最初期の、おそらくアウグストゥス帝期（在位：前27- 後14年）のレベルは1.35m であったが、その後何度も嵩上げされ、クラウディウス帝期（在位:41-54年）には1.65m となった。この路面の上に盛り土がなされて最初の墓地通りが敷設され、最初の舗装が施された[33]。[6] セコンダリア門：墓地通りが至るセコンダリア門は明らかにローマ門より高いレベルに立っており、後から設置された門であることは疑いない。その時期については従来、特に理由もなく、ローマ門の刷新（100年頃）と関連づけられていたが、近年の調査によってハドリアヌス帝期（在位：117-138年）になってからの設置と訂正された[34]。[7] ヘルモゲネス通り：セコンダリア門の設置と同じ時期（つまり２世紀前半）に、オスティア街道と墓地通りをつなぐヘルモゲネス通りが、既にあった墓所群を破壊してその上に敷設された。そのため既にあった墓所群は、この道によって蓋をされた形で地下に埋もれることとなった[35]。[8] ヘルモゲネスの墓：そして２世紀後半には、この通りの上に、道にせり出すような形でヘルモゲネスの墓が建設された[36]。この立派な墓の主ドミティウス・ファビウス・ヘルモゲネスは、彼の墓碑銘によれば、都市から馬を与えられた者であり、貴族造営官の書記、都市参事会員、神君ハドリアヌス帝の神官を務め、彼の葬儀に際しては都市参事会員から公的な葬送行列によって名誉を与えられたオスティアの名士である[37]。（時代が前後するが、ヘルモゲネス通りという名前は、通りより後に建てられたヘルモゲネスの立派な墓に因んで、現代の学者が付けた名前である[38]）。このような過程をへて、*TDO*.1が出土した墓所 A2-I は、ヘルモゲネスの墓のほぼ真下に埋もれることになった。

２－３．墓所 A2-I の歴史：

この場所の歴史はローマ門ネクロポリスの第 I 期から始まる。ローマ門に入る手前の左手にある一角（逆にローマ門から出て右手の東に約14m の地点）に[39]、前150年頃に年代づけられる最古の土地利用の痕跡 Z9が確認され、ここでは簡単な火葬が行われていた[40]。同じ場所に、ローマ門の建設と同じ時期（前75-50年）、墓所 A2-I が作られた[41]。これは長方形の簡素な囲い地（7.70m × 5.10m）で、おそらく屋根はなく、オスティア街道に向かって玄関が開き、凝灰岩でできた立派なファサードがあった[42]。〈30の骨壺が砂の中の様々な深さに埋納されていたのが発見された。

時期区分（年代）	出来事
第 I 期（前 150 年頃）	簡単な火葬場 Z9
第 II 期（前 75-50 年頃）	墓所 A2-I が建設（この中で *TDO*.1 が発見）
第 III 期（後 14-37 年）	墓所 A2-II が増設（このそばで *TDO*.2 が発見）
第 IV 期（後 2 世紀前半）	オスティア街道と墓地通りをつなぐ道りが墓所 A2-I と墓所 A2-II を埋め立てて建設
第 V 期（後 2 世紀後半）	その通りの上に道にせり出すようにヘルモゲネスの墓が建設

表2：墓所 A2-Ⅰと墓所 A2-Ⅱの歴史

どれが古い墓所に属しどれが新しい墓所に属していたのかを決定することはほとんど不可能である。骨壺群の上にある砂の中には nella sabbia che stava sulle olle、帝政期の壺や土器も発見された。骨壺 a の中に骨の破片多数、骨壺 c の中に共和政期の１アス貨（重さ10.5g）、骨壺 b の中に紡錘形の土器と目の形の彫り込みがある細工された骨 ossi lavorati の断片、骨壺 d の中に共和政期の１アス貨（重さ29.5g）と青銅の指輪、骨壺 e の中に細工された骨の断片、骨壺 e のそばに鉄の槍先、小さな皿、座った女性の土偶〉があった(43)。また骨壺 f のそばで Presso l'olla f、文字が書かれた一つの鉛の薄板 una lamina di piombo iscritta（m. 0,105×0,105）が発見された（図版の所在は註を参照）(44)。これが表題の呪詛板 *TDO*.1である。この墓所は前１世紀中頃に南東に向かって拡張されたので、現在では北西の古い墓所を A2-I、南東の新しい墓所を A2-II と呼んで区別している(45)。その後の歴史もまとめて年表にまとめたものが表２である。

２－４．呪詛板の年代：

以上の考古学的文脈から判断すると、*TDO*.1の年代は、墓所 A2-I が作られた前75-50年より後、同墓所がヘルモゲネス通りに蓋をされて地下に埋もれる後２世紀前半より前、ということは確定した。しかしこの呪詛板が発見された砂地には共和政末期から帝政期にかけての遺物が混在しており、どの骨壺がどの時代層に属するか見極めることは困難である。

これまでの研究史を振り返って見ても、やはり同様に、呪詛板の年代は自明でないことが判明する。小論で依拠した研究（Vaglieri［1911］; *CIL*.XIV Suppl.［1930］5306; *Scavi di Ostia* III-1［1958］; *CIL*.I^2［1986］3036; Heinzelmann［2000］; Zevi［2004.1］; Cébeillac-Gervasoni et al.［2010］）のほとんどは、考古学的な証拠に基づくものであり、この呪詛板が発見された墓の年代には言及するものの、呪詛板の年代には言及していない。特に *CIL*. I^2［1986］3036は「（この呪詛）板が墓と同じ年代なのか、それともその墓が造られたずっと後に置かれたのか、我々には分からない」

と書いている。一方、プロソポグラフィックな研究に基づく Zevi［2004.1］p.23のみが「共和政末期の一つの呪詛板」a late Republican *tabella defixionis* と明記している。Zevi のプロソポグラフィックな研究については後述するが、それとて決定的な証拠とは言えないように思われる。従ってこの呪詛板の年代は、帝政期に至る可能性も否定せず、幅を持たせて「前75-50年より後」と表記することとする。

３．テキストの解読

以下では、テキストの解読を試みるが、その前に呪詛板そのものの観察が必要である。呪詛板の外見はテキストの作成手順を示唆しているからである。

３－１．材質とサイズ：

呪詛板の材質は鉛[46]、サイズは縦10.5cm 横10.5cm[47]、もともと写真はないが精巧なスケッチが残されている（スケッチの掲載場所は註を参照）[48]。この呪詛板は早くも1930年までに所在不明となったようだ[49]。

３－２．穴：

まず注目すべきは、呪詛板に見られるいくつかの穴である。これらの穴について Vaglieri［1911］p.87は次のように解説している。「それ（呪詛板）は二つ折りの書板のように畳まれていた。五つの穴を呈し、紐が通されることによって、それ（紐）がそれ（呪詛板）を閉じていた la quale era piegata a guisa di un dittico. Presenta cinque fori per il passaggio del filo che la chiudeva」。また *CIL*.XIV Suppl.［1930］5306は上の解釈を踏襲して、「鉛の板（0,105×0,105）、二つ折りの書板のように畳まれていた。１本の紐があって、それによってかつては（呪詛板が）結び付けられていたが、（その紐は）失われてしまった。五つの穴があり、それらを通って１本の紐が通されていた tabella plumbea（0,105×0,105）, in modum diptychi plicata; filum, quo olim colligata erat, periit, foramina quinque, per quae filum ductum erat, exstant」と解説している。さらに Cébeillas-Gervasoni et al.［2010］p.128も同様に、「二つに折り畳まれた薄板で、１本の紐によって閉じられていた、（その紐は）今でも見える五つの穴を通っていたに違いない Laminetta piegata in due e chiusa da un filo che doveva passare attraverso i cinque fori ancora visibili」と解説している。このように、二つ折りの書板のように畳まれた状態で発見されたこの呪詛板は、〈五つの穴に１本の紐が通されて封印されていた〉と伝統的に解釈されて来た。しかし筆者（前野）はまずこの解釈に首を傾げたくなる。

筆者（前野）は Vaglieri［1911］fig.6をコピー機でコピーし、穴の部分をくり抜いて実際に穴を開け、呪詛板中央に見える少し斜めの縦の折り目に沿って内側に折っ

てみた。すると予想通り、重なり合う穴は一組もなかった。従ってこの小実験により、五つの穴に紐を通して呪詛板を封印したという解釈は成り立たないことが証明された。

次に、そもそも穴の数も数えようによっては八つにも数えられるが、さらによく観察すると、これらの穴には、呪詛板が作成される前からあった穴と、作成された後に生じた穴の２種類に分類することが可能だと判明した。つまり一方で、テキストの一部を欠損させている穴は作成後の腐食による穴であり、また他方で、文字が避けている穴は作成以前からあった穴ということである。まず腐食による穴を探すと、後に示したテキストの復元箇所を見れば明らかなように、左端２行目と３行目にかけての穴①、右端１行目の穴②、中央付近４行目と５行目にかけての穴③が、それに該当する。右端下端の穴④は余白にあり、文字を欠損させていないが、呪詛板の右辺を欠損させているので、腐食によるものと判断した。一方、右端３行目の下の穴⑤に着目すると、３行目の末尾の ser に続く ornatrix は、明らかにこの穴を避けて少し上方に書かれている。従って、この穴はテキストが書かれる以前からあった穴であると考えられる。

そしてこの穴には特徴がある。それはこの穴を囲むように、より大きな円形の筋が見られることである。同様にこの円形の筋を持つ穴は、下辺に水平に等間隔に並んで三つ認められる。これらの穴を右から左へ⑥、⑦、⑧とすると、穴⑤は穴⑥の真上に位置しており、これら四つの穴には明らかな規則性が伺える。従って、穴⑤、⑥、⑦、⑧は意図的に開けられたものであり、おそらく釘穴であろう。そして釘穴の周辺にある、より大きな円形の筋は、打ち込まれた釘の釘頭による圧迫痕だと推測される。

そうならば、この鉛板は元々、何らかの部材に釘で固定されていたものであり、それを意図的に引き剥がして、あるいは既に引き剥がされていたものを再利用して、呪詛板を作ったと考えられるのである。そしてこの解釈が正しいならば、上に見た五つの穴に関する従来の解釈は、この呪詛板が書板のような形態をしており、なおかつ複数の穴を持っていたことから、本物の書板のように紐で閉じられたのだろうという直感的な類推に基づく解釈であり、さらにそれは100年以上にわたって無批判に引き写しされて来た記述に過ぎなかったと言わざるを得ないだろう。

もちろん、その部材が何であったかは不明であるが、木材の可能性が考えられる。また呪詛板がしばしば冷たい水を通す鉛の水道管から作られたことを考慮するならば[50]、水との関連性が推測でき、例えば、木材に打ち付けられた防水用の鉛板 !? だったのかもしれない。

３－３．文字：

次に文字に着目すると、丁寧に書かれ、大きさの粒も揃っており、線も伸びやか

で、行もほぼ真っ直ぐである。ただし１行目の末尾は少しだけ下がり、３行目の末尾は釘穴を避けるために少し上にずれている。また単語と単語の間には、不規則的ではあるが、読点が付されており、読点には短い縦線２本、短い縦線１本、点の３種類がある。これらの特徴からして、このテキストは文字を書き慣れた人物の手によると思われる。ただしこのテキストが呪詛者本人によって書かれたのか、その道のプロに依頼して書いてもらったのかは分からない。

３－４．テキストと試訳：

	Agathemeris ‖ Manliae · se[r(va)]	アガテメリス，マンリアの女奴隷
	[. . .]lea ‖ Fabiae ‖ ser(va) ornatrix	[- - -]レア，ファビアの女奴隷，女美容師
	[Ca]lethvche · Vergiliae ser(va) ornatrix	カレテュケ，ウェルギリアの女奴隷，女美容師
	Hilara · Liciniae [ser(va) orn]atrix	ヒララ，リキニアの女奴隷，女美容師
5	Crheste ‖ Corn[eliae] ser(va) ornatrix	クレステ，コルネリアの女奴隷，女美容師
	Hilara · Seiae · ser(va) ornatrix	ヒララ，セイアの女奴隷，女美容師
	Moscis · ornatrix	モスキス，女美容師
	Rvfa ‖ Apeiliae · ser(va) ornatrix	ルファ，アペイリアの女奴隷，女美容師
	Chila ‖ ornatrix	キラ，女美容師

３－５．呪詛テキストのタイプ：

この呪詛板は呪詛の標的の名前しか書かれていない非常にシンプルなものであり、scripta et demandata（書かれて神霊に委ねられた名前）と呼ばれるタイプの呪詛テキストである(51)。従ってこの板が呪詛板であることは疑い得ない。またたとえ呪文などが書かれていないとしても、呪詛者は呪詛板を墓地に置く時、プロのコンサルタントから受けた指示通りに何らかの儀式を行い、呪文を唱えたであろう。呪詛板の発展過程として、初期のアッティカやシチリアの呪詛板は名前だけのタイプ name-only types に属し、標的の名前を知りそれを使うこと自体、疑いなく名前の主に対する力の行使であり、おそらく名前というものはある意味、標的の化身であったと見られていたのだろう（pars pro toto 魔術）。この基本的なタイプの呪詛板は次第と減少し、後１世紀までには完全に消滅した(52)。一般に呪詛板のコンテンツが冗長・複雑かつシンクレティックになるのは２世紀以降のことである(53)。

３－６．読み：

まず問題になるのは２行目の人名［ . . .]lea である。かつては［Ac?]hulea(54)、[Ac]-hillea(55)、Hylea（?）(56)と様々な読みがあったが、近年では［ - - -]lea(57)として残し、復元が断念された(58)。また小さなことではあるが、４行目の Liciniae をそのまま読むものと(59)、Licini[a]e と復元するものがある(60)。さらに細かなことではあるが、Vaglieri［1911］p.87の６行目には scr(va) とあり、ser(va) の e が c になって

いる（おそらく誤植であろう）。また *CIL*.XIV Suppl. 5306［1930］のみが、１行目 ser の r を se[r] と補いとして記載しているが、これは正しい。また３行目の人名 [C]alethuche には（sic）[61] あるいは（!）[62] が、５行目の人名 Crheste には（sic）[63] あるいは（sic!）[64] あるいは（!）[65] が、７行目の人名 Moscis には（sic）[66] が付されており、名前の綴りに問題があることを示唆している。さらに、読みには問題がないが、２行目の人名は [C]alethuche と補われているが[67]、Vaglieri［1911］p.87, fig.6の精巧な模写を見る限り、[Ca]lethuche と補った方が良さそうである。その他、どの読みも ser を ser(va) と補っているにもかかわらず、人名においては v を u と表記しており整合性がない。そこで小論では u を v で統一することとした。また読みには問題ないが、８行目の Apeiliae は Afilia のことかと見る疑問もある[68]。

３－７．女奴隷たる女美容師たちの名前：

この呪詛板に書かれた名前は２種類に分類される。①呪詛の標的である女奴隷たる女美容師たちの名前（各行の第１の要素）と、②彼女らの女主人の名前（各行の第２の要素）である。

まず①の名前について見ると、復元不可能な２行目「[- - - ］レア」[- - -]lea を除いて、全てギリシア人の女性名である。１行目「アガテメリス」Agathemeris（希 Ἀγαθημερίς / 羅 Agathemeris）[69]、３行目「カレテュケ」[Ca]lethvche（希 Καλλιτύκη, Καλιτύκη / 羅 Calityche, Caletyche, Caletyce, Callityche, Callitic(e)）[70]、４行目と６行目「ヒララ」Hilara（希 Ἱλάρα / 羅 Ilara, Hilara）[71]、５行目「クレステ」Crheste（希 Χρήστη / 羅 Crheste, Chreste, Chresta, Creste, Cresta, Criste）[72]、７行目「モスキス」Moscis（希 Μοσχίς / 羅 Moschis）[73]、８行目「ルファ」Rvfa（希 Ῥοῦφα / ラテン名の事例なし）[74]、９行目「キラ」Chila（希 Χίλα / 羅 Chila）[75]。当時に正書法はなく、耳で聴いた音を頼りにラテン文字に置き換えたに違いないので、綴り方にはいくつかのバリエーションがあり、綴り間違いとは言えないだろう。碑文における奴隷の名前は一つだけの名前、とりわけギリシア名を持つことが多かった[76]。

３－８．女主人たちの名前：

次に②の名前について見ると、女性名詞の属格形は、女奴隷たる女美容師の所有者たる女主人の名前を示している。ローマの女性市民の名前は原則、父親の氏族名 nomen の女性形であり、家族名 cognomen の女性形もあったが、その名前は結婚しても変わらない[77]。従って、女主人の名前は彼女の父親の家名を名乗っているのであって、既婚女性の場合でも、嫁ぎ先の家名を名乗っているのではない。それ故、この呪詛板に見られる女主人の名前の属格形は、彼女が既婚女性であっても、女奴隷たる女美容師が嫁ぎ先の家の所有ではなく、女主人自身の所有であることを表している。

３－９．エリートの家名：

女主人の名前は彼女の名前であると同時に、父親の氏族名 nomen ないし家族名 cognomen に由来する家名でもある。この呪詛板に見られる家名はいずれも、８行目の Apeilia（Afilia のこと？）を除いて、オスティアの碑文に残された名門である。特に、ファビウス家とコルネリウス家はオスティアにおける共和政後期のエリートに属した。オスティアにおいてお抱え女美容師を所有することが出来た家はそう多くはなかったので[78]、呪詛板の家名と碑文の家名は一致する可能性が低くないと考えられる。

特に興味深いのは女主人セイアが属する家である。この家は間違いなく certamente 裕福な騎士のマルクス・セイウスの家と考えられている。マルクス・セイウスはキケロがウァッロとアッティクスに当てた書簡にしばしば言及されており、前46年11月にはおそらく既に死亡していただろう。彼は、大プリニウスによれば、ガチョウのフォアグラを考案した人物の一人と目され（Plin. *HN*. 10.52）[79]、ウァッロによれば、オスティアの海のそばに農場を所有し（Varro. *rust*. 3.2.7）、そこでガチョウの群れを作るために、孵化、交尾、卵、雛、肥育という飼育の５段階に注意を払ったと言われている（Varro. *rust*. 3.10.1）。その他、耕作、養蜂、孔雀の飼育によって大きな利益をあげ、またデロス島とアフリカに商業的関心を持っていた人物として知られている[80]。

またクラウディウス帝期（在位：41-54年）に、セイウス家の何人かの解放自由人 liberti が、皇帝の守護神 Lares Augusti の首位監督官 magistri primi たちの中にいて、彼らが大理石製の小さな円形の建物を奉献したことから、セイウス家が皇帝礼拝を促進することによって、自らの皇帝家支持の意志を表明したと考えられており、このような彼らのオスティアにおける存在感は、それ以前からあったに違いなく、このことは共和政末期の一つの呪詛板 a late Republican *tabella defixionis*（*TDO*.1）の６行目「ヒララ、セイアの女奴隷、女美容師」が証明していると Zevi は考えているが[81]、Cébeillac-Gervasoni et al. は懐疑的である[82]。

セイウスの同定は *TDO*.1の年代にも関わってくる重要な問題ではあるが、決定的な証拠はない。いずれにせよ、小論の目的はオスティアの庶民の声に耳を傾けることにあるので、オスティアの名門の問題についてこれ以上立ち入ることは控える。

４．女美容師たちの人間模様

４－１．女性の職業：

古代ローマ社会において女性が就いた仕事は、墓碑銘の分析から103種類ほどが知られており、統計的に見て、職業を持った女性の大半は奴隷ないし解放自由人であり、自由人は稀であった[83]。その中に女美容師 ornatrix も含まれる[84]。彼女たち

の中には、裕福な家に雇われたお抱え女美容師もいたし[85]、仲間といっしょに街の店で働く女美容師もいた[86]。

４－２．女美容師の仕事：

髪を切ることはもちろん、染める、ブリーチする、洗髪する、フケを止める、結う、カールさせる、薄毛治療、ウィッグを作る、エクステを作る、その他、化粧する、爪を切る、アクセサリーを付ける、着付けするまで含まれた[87]。毛染め剤にはクルミ、イカスミ、胆汁、腐敗したヒルが使われた。漂白剤には鳩の糞と灰を混ぜたものが、リンスには尿が、フケ止めや薄毛治療には牛や馬の糞が使われた。これらの強烈な匂いをごまかすために強い香水が使われた。また北方で捕虜にされた女性の髪から金髪のエクステやウィッグを作った。これら一連の作業には何時間も要した[88]。また流行のヘアスタイルは、帝政期においては、皇妃のものが上流階級の女性たちに真似されて広まった。帝政期には髪を高々と盛り上げるのが流行ったが、*TDO*.1に書かれた女美容師たちが働いていたであろう共和政末期には、わりとシンプルなのが好まれたようである[89]。

４－３．女主人との人間関係：

女主人とお抱え美容師との人間関係は常に緊張を孕んでいた。気難しい女主人に小言を言われるくらいならマシな方だが、巻き毛の巻き方を間違ったり、ヘアピンが一つ外れただけでも、すぐに癇癪をおこして女美容師をヘアピンで刺したり、鞭で叩いたりといった体罰は稀ではなかった。逆に気に入られる仕事ができれば、チップを弾んでもらえることもあった[90]。しかし *TDO*.1の標的はこのような暴君的な女主人たちではなかった。

４－４．同業者たちとの人間関係：

TDO.1に書かれた女美容師たちのグループを女性たちの同職組合 collegium の一事例と捉える研究がある[91]。報告者もその解釈に賛同する。そこで同職組合の機能について考察する必要がある。

帝政期のローマ帝国には、至る所に様々な手工業者による何百もの同職組合があった。同職組合なので、同業者間の情報交換や仕事の調整も行われたであろうが、何よりも重要な機能は社交にあった。入会は個人の自由意志であり、たいてい月に一度は集会が行われ、会員は自分の組合の集会所 schola に集い、あるいは貧しい組合は居酒屋を集会所として、まず自分たちの職業の守護神に捧げ物をし、皆で飲食を共にしながら互いの誕生日を祝ったり、談笑・冗談・噂話を楽しんだ。楽しい場の雰囲気を乱さないように、異議申し立ての類を議論する場としては別途、定期的に開かれる業務会が用意されていた。また集会の場で不適切に騒ぐ者、他人を侮辱

する者、規律を乱す者に対しては、定められた罰金が課された。さらに積み立て金を支払うことによって、将来の自分の墓所と埋葬の準備もした。このような機能を持った同職組合は、身よりのない奴隷たちにとっては“家族”のような存在であり、社会的な圧力から非難するための“家”でもあった[92]。

４－５．*TDO*.1のテキストに見られる人間関係：

ここでもう一度 *TDO*.1のテキストを振り返ってみよう。９人の標的はほぼ一律に「標的の名前、女主人の名前、奴隷、女美容師」と書かれているが、不規則な点もある。つまり１行目のアガテメリスだけには「女美容師」がなく、７行目のモスキスと９行目のキラには「女主人の名前」がない。これを単なる書き忘れ、記憶忘れ、知らなかった、スペース不足に帰すこともできるが、もし素直に読むならば、アガテメリスは女美容師ではなかった、またモスキスとキラは女奴隷ではなかったことになる。もし全員が女奴隷であったなら、あるいは全員が女美容師であったなら、冒頭に女奴隷たち ser(vae)、女美容師たち ornatrices と書くことも出来たはずである。しかしそうなっていないのは、やはり一律に同じではなかったからではないだろうか。

まずモスキスとキラについて考えると、彼女たちが女奴隷と書かれなかった理由は、彼女たちが女奴隷ではなく、解放自由人あるいはその子孫であったからだと考えられる。彼女たちはお抱えの女美容師ではなく、街の店で働く女美容師たちだったのだろう。

次にアガテメリスは、素直な読みに従うと、女美容師ではなかったことになるが、これもまた考えにくい。この呪詛板に書かれたのは女美容師の同職組合のメンバーと見なされているし、事実それ以外の職業名は書かれていないので、皆が女美容師であったと考えるのが自然である。だとすればアガテメリスは元女美容師であったと解釈してはどうだろうか。彼女が年配の女性であり、既に女美容師を引退していたと考えれば、若い現役の女美容師たちと並んで名前が書かれていたとしても不思議ではない。また彼女の名前が書かれた場所は１行目、すなわち彼女は標的の筆頭であった。呪詛者が最も憎んだ人物の名前を筆頭に書いたことは当然である。彼女は引退してもなお、自分の率いる派閥に強い影響力を持ち続けていた人物だったのではないだろうか。

最後にこの呪詛板をローマ門ネクロポリスの墓所 A2-I に置いた呪詛者もまた、女美容師であったに違いない。そしてこの同じ同職組合のメンバーであったに違いない。しかし何らかの理由で冷遇され、同職組合から追放されたのではないだろうか。その追放を主導したのがアガテメリスの率いる派閥であったのかも知れない。全て推測ではあるが。

おわりに

もし何らかのトラブルによって、同職組合から追放された女美容師がいたとしたら、彼女の孤立感や焦喪感はいかほどだっただろうか。現世においても居場所がなく、来世における供養も約束されない。呪詛に至った原因は知りようがないが、筆者（前野）の耳には、この呪詛板からそうした者の慟哭の声が漏れ聞こえてくるような気がしてならない。

参考文献

Borgia [2019] = Emanuela Borgia, Una *Tabella Defixionis* dalla Necropoli dell'Isola Sacra, Mireille Cébeillas-Gervasoni, Nicolas Laubry, Fausto Zevi (a cura di), *Ricerche su Ostia e il suo Territorio*, Atti del Terzo Seminario Ostiense (Roma, École Française de Rome, 21-22 Ottobre 2015), École Française de Rome (2019) p.125-138。

Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] = Mireille Cébeillac-Gervasoni, Maria Letizia Caldelli, Fausto Zevi, *Epigrafia Latina, Ostia: Cento Iscrizioni in Contesto*, Edizioni QUASAR, Roma [2010], traduzione dell'edizione origiale, Épigraphie latine, Armand Colin, [2006]。

CIL.I^2 [1986] = *CIL*.I^2, Pars II, Fasc. IV: Addenda tertia. 1: Textus 2: Tabulae. cura A. Degrassi, [1986]。

CIL.XIV [1887] = *CIL*.XIV, Inscriptiones Latii veteris Latinae, cura H. Dessau, [1887]。

CIL.XIV Suppl. [1930] = *CIL*.XIV, Supplementum Ostiense, cura Lothar Wickert, [1930]。

Descoeudres [2001] = J.-P. Descoeudres (ed.), *Ostia, port et porte de la Rome antique, musée Rath Genève*, Genève, Georg Edituer - Musée d'art et d'histoire, [2001]。

DNP = Der Neue Pauly。

DT [1904] = Augustus Audollent, *Defixionum Tabellae: Quotquot Innotuerunt Tam in Graecis Orientis Quam in Totius Occidentis Partibus Praeter Atticas in Corpore Inscriptionum Atticarum Editas*, Paris [1904]。

Heinzelmann [2000] = Michael Heinzelmann, *Die Nekropolen von Ostia. Untersuchungen zu den Gräberstraßen vor der Porta Romana und an der via Laurentina*, München [2000]。

Karivieri [2020] = Arja Karivieri (ed.), *Life and Death in a Multicultural Harbour City: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity, Acta Instituti Romani Finlandiae*, vol.47, Roma [2020]。

Karivieri [2020] = Arja Karivieri, New Trends in Late Antique Religions, Beliefs and Ideas: Christianity, Judaism, Philosophy and Magic in Ostia, Arja Karivieri (ed.), *Life and Death in a Multicultural Harbour City: Ostia Antica from the Republic through Late Antiquity, Acta Instituti Romani Finlandiae*, vol.47, Roma [2020] p.371-385。

Kolb / Campedelli [2005] = Anne Kolb / Camilla Campedelli, I collegi delle donne: L'esempio

delle mulieres, *Donna e Vita Cittadina della Documentazione Epigrafica: Atti del II Seminario sulla condizione femminile nella documentazione epigrafica*, Verona, 25-27 marzo 2004, a cura di Alfredo Buonopane e Francesca Cenerini, Fratelli Lega Editori, Faenza, [2005], p.135-142。

LGPN III.A = P. M. Fraser / E. Matthews (eds.), *A Lexicon of Greek Personal Names: Peloponnese, Western Greece, Sicily, and Magna Graecia*, Oxford University Press [1997]。

OCD[3] [1996] = Simon Hornblower / Antony Spawforth (eds.), *The Oxfrod Classical Dictionary*, Oxford / New York [1996]。

Ogden [1999] = Daniel Ogden, Binding Spells: Curse Tablets and Voodoo Dolls in the Greek and Roman Worlds, Valerie Flint / Richard Gordon / Georg Luck / Daniel Ogden (eds.), Witchcraft and Magic in Eupope, Ancient Greece and Rome, The Athlone Press, London [1999] p.3-90。

Ruggiero [1895-1922] = Ettore de Ruggiero (a cura di), *Dizionario Epigrafico di Antichità Romane* (A-H), [1895-1922], Vol.II, Part 2 (Consularis-Dinomogetimarus)。

Scavi di Ostia III-1 [1958] = Maria Floriani Squarciapino / Italo Gismondi / Guido Barbieri / Herbert Bloch / Raissa. Calza (a cura di), *Scavi di Ostia: Vol. 3, Le necropoli, parte 1: Le tombe di età repubblicana e augustea*, Istituto Poligrafico dello Stato, Libreria dello Stato, Roma [1958]。

Solin [1968] = Heikki Solin, *Eine neue Fluchtafel aus Ostia* (Commentationes Humanarum Litterarum, 42), Societas Scientiarum Fennica, Helsinki [1968]。

Vaglieri [1911] = *Atti della R. Accademia dei Lincei anno CCCIC*, *serie quinta*, *Notizie deglie Scavi di Antichità*, vol.VIII, Roma [1911], p.84-87。

Vaglieri [1912] = *Atti della R. Accademia dei Lincei anno CCCVIII, serie quinta, Notizie deglie Scavi di Antichità*, vol.IX, Roma [1912], p.51-52。

Varro, *rust*. = Marcus Porcius Cato on Agriculture, Marcus Terentius Varro on Agriculture, with an English Translation by William Davis Hooper, Revied by Harrison Boyd Ash, Loeb Classical Library, Harvard University Press [1935]。

Zevi [2004.1] = Fausto Zevi, Cicero and Ostia, F. Zevi, Ostia, Cicero, Gamala, Feasts & the Economy. Papers in memory of John H. D'Arms, a cura di A. Gallina Zevi e J.H. Humphrey, JRA (Journal of Roman Archaeology) Suppl.57, [2004], p.15-31。

Zevi [2004.2] = Fausto Zevi, P. Lucilio Gamala senior : un riepilogo trent'anni dopo, F. Zevi, *Ostia, Cicero, Gamala, Feasts & the Economy. Papers in memory of John H. D'Arms*, a cura di A. Gallina Zevi e J.H. Humphrey, JRA (Journal of Roman Archaeology) Suppl.57, [2004], p.47-67。

青柳［1990］＝青柳正規『古代都市ローマ』中央公論美術出版［1990］。

ヴェーバー［2011］＝カール＝ヴィルヘルム・ヴェーバー『古代ローマ生活事典』小林澄栄訳、みすず書房［2011／原書1995］。

ケッピー［2006］＝ローレンス・ケッピー『碑文から見た古代ローマ生活誌』小林雅夫／梶田知志訳、原書房［2006／原書1991］。

坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版［2017］。

サンジョルジョ［2017］＝マルコ・サンジョルジョ「河と海の間の港町オスティア」、坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版［2017］21-32頁。

中野『プリニウスの博物誌』＝中野定雄／中野里美／中野美代訳、第六版、雄山閣［2001］。

ペッレグリーノ［2017］＝アンジェロ・ペッレグリーノ「オスティア　歴史的―考古学的プロフィール」、坂口明／豊田浩志編『古代ローマの港町オスティア・アンティカ研究の最前線』、勉誠出版［2017］3-13頁。

水谷『羅和辞典』＝水谷智洋編『羅和辞典』改訂版、研究社［2009］。

レオン［2009］＝ヴィッキー・レオン『図説　古代仕事大全』本村凌二監修、原書房［2009／原書2007］。

註

(1)　小論は2021年10月31日にオンラインで開催された2021年度広島史学研究会大会西洋史部会において、小シンポジウムの形で報告された４本の報告のうち、前野弘志「オスティア・アンティカ出土呪詛板に書かれた美容師たち」に加筆修正を加えて論文化したものである。

(2)　オスティアからティベリス川を超えて北西に広がるイゾラ・サクラ（オスティアとそれに替わる新港ポルトゥスの間に広がる海岸平野）のネクロポリスから１枚の呪詛板が出土しているが（Borgia [2019] p.125-138）、ここではオスティア出土に限定するのでこれについては考察しない。

(3)　Vaglieri [1912] p.22。

(4)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.13。

(5)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.13-14, p.54の n.15, p.239。ここで p.14、茶色のニスが塗られた三つの小さな壺が発見された位置として、「象牙の埋納品のそばで」“nei pressi,,[15] della deposizione degli avori と強調されている理由が分からない。引用符で囲まれた部分には註15が付けられ、そこには出典として Vaglieri［1922］p.22と書かれているが、そこには「細工された骨 ossi lavorati が近ごろ再び発見された墓のそばで」と書かれているだけで、象牙 avori の埋納品が発見されたとは書かれていない。細工された骨と象牙を混同したのだろうか。

(6)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.20-22, p.239。

(7)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.22。

(8)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.21, fig.2: pianta delle tombe 1 e 2（方位マークがない）、fig.1: pianta generale（方位マークがある）。

(9)　*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.23。

(10)　Heinzelmann [2000] S.124-126, S.125, Abb.41.PR A2（I. Phase）（方位マークがあり、これら二つの墓所が北と東に並んでいることがはっきりと分かる）。

(11)　Solin [1968] S.3。

(12)　Solin [1968] S.4, Anm.2; S.30。

(13)　距離は *Scavi di Ostia* III-1［1958］の fig.1 - Pianta Generale の縮尺に基づいて筆者（前野）が計算した結果である。この計算に従えば、ローマ門と墓所 A2-1との距離は 18m となる。

(14)　墓所11の記述は *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.29-30。

(15)　Solin [1968] S.4, Anm.4。

(16)　Solin [1968] S.4。

(17)　Solin [1968] S.5。

(18)　Solin [1968] S.5。

(19)　Solin [1968] S.5。図版は Solin [1968] S.11-12、写真は Tafel I-III を参照。

(20)　テキストは Solin [1968] S.10, S.13。

(21)　Solin [1968] S.13。

(22)　Solin [1968] S.13-14。

(23)　Descoeudres [2001] p.448; Karivieri [2020] p.384, p.506。後者は「約30人の奴隷 slaves あるいは解放奴隷 freed slaves を標的にしている」と解説しているが（p.506）、それは Solin［1968］が一般論を言っている文章（S.14, Z.16-21）の引き写しではないだろうか。ちなみに筆者（前野）は、日本の学界で一般に使用されている「解放奴隷」でなく、同じ意味で「解放自由人」という語を使用する。英語 freed slaves ／ドイツ語 Freigelassene と訳されるラテン語は liberti であり、制約があるとは言えもはや「奴隷」ではなく「自由人」だからである。

(24)　Vaglieri [1912] p.52。

(25)　https://www.ostia-antica.org/regio2/5/5-1.htm（最終閲覧日：2022年６月21日）。

(26)　オスティアの衰退は３世紀半ばから始まったとされ、その原因は帝国規模の政治的経済的危機と商業活動の重心がポルトゥスに移動したことによると考えられている（ペッレグリーノ［2017］10頁）。

(27)　以上の文章における方位は Vaglieri の報告書および上記ウェブサイトの記述に従ったが、他の地図と比較すると、東は北東に、北は北西に、西は南西に、南は南東にと、反時計回りに45度回転させた方がより正確であるように思った。

(28)　オスティアには、陸の玄関であるローマ門とセコンダリア門に加えて、海の玄関ともいうべき海岸門があり、さらにラウレンティウム地方へと向かうラウレンティウ

ム門があるが、呼び名はいずれも現代のものである（ペッレグリーノ［2017］7頁）。オスティアのネクロポリスは、ローマ門の前に展開するローマ門ネクロポリスの他に、ラウレンティウム街道に沿って展開するラウレンティウム街道ネクロポリスがある。

(29) ペッレグリーノ［2017］6頁。

(30) 以上、ローマ門について、Heinzelmann [2000] S.32。

(31) 以上、オスティア街道について、Heinzelmann [2000] S.31-32。

(32) 以上、ローマ門ネクロポリスについて、Heinzelmann [2000] S.36-37, Abb.15-18（方位マークがない）。

(33) 以上、墓地通りについて、Heinzelmann [2000] S.33。

(34) 以上、セコンダリア門について、Heinzelmann [2000] S.32-33。

(35) 以上、ヘルモゲネス通りについて、*Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.20; Heinzelmann [2000] S.33, S.37, Abb.17。

(36) Heinzelmann [2000] S.37, Abb.18。

(37) *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306, 4642; cf. *CIL*.XIV [1887] 353。

(38) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.20。

(39) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.20; Heinzelmann [2000] S.125。小論の註13の計算（18m）と少し合わない。

(40) Heinzelmann [2000] S.34, S.36, Abb.15, S.125。

(41) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.239（墓所1、前1世紀前半）; Heinzelmann [2000] S.126（墓所A2-I、前1世紀第二四半世紀から中頃）。

(42) Heinzelmann [2000] S.125。

(43) Vaglieri [1911] p.85-87の要約 ; cf. *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.21; Heinzelmann [2000] S.125-126。

(44) Vaglieri [1911] p.85; *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.21; Heinzelmann [2000] S.125。

(45) Heinzelmann [2000] S.126, S.36, Abb.16。

(46) Vaglieri [1911] p.87; *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137; *CIL*.I^2 [1986] 3036; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(47) Vaglieri [1911] p.87; *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306; *CIL*.I^2.[1986] 3036; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(48) Vaglieri [1911] p.87, fig.6; *CIL*.I^2 [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128; cf. *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306（図式的なもの）。

(49) *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(50) Ogden [1999] p.12-13。

(51) Vaglieri [1911] p.87; *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306。同様のものとして *DT*.215（2世紀末

あるいは３世紀初め）などがある（*DT* [1904] p.290）。Ruggiero [1895-1922], Vol.II, Part 2, s.v., Defixio に scripta et demandata の解説があるらしいが、入手できなかったので未読。

(52) 以上、呪詛板の発展過程について、Ogden [1999] p.6。

(53) Ogden [1999] p.4。

(54) Vaglieri [1911] p.87。

(55) *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306。

(56) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125。

(57) *CIL*.I^2 [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(58) 復元された名前 Achulea, Achillea, Hylea はいずれも *LGPN* III.A [1997] には掲載されていない。

(59) Vaglieri [1911] p.87; *CIL*.I^2 [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(60) *CIL*. XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125。

(61) Vaglieri [1911] p.87。

(62) Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(63) Vaglieri [1911] p.87; Heinzelmann [2000] S.125。

(64) *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137。

(65) *CIL*.I^2 [1986] 3036; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(66) Vaglieri [1911] p.87。

(67) Vaglieri [1911] p.87; *CIL*.XIV Suppl. [1930] 5306; *Scavi di Ostia* III-1 [1958] p.137; Heinzelmann [2000] S.125; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.128。

(68) Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。

(69) *LGPN*, III.A, Ἀγαθημερίς, [1997] p.2。

(70) *LGPN*, III.A, Καλλιτύκη, [1997] p.235。

(71) *LGPN*, III.A, Ἰλάρα, [1997] p.218。

(72) *LGPN*, III.A, Χρήστη, [1997] p.478。

(73) *LGPN*, III.A, Μοσχίς, [1997] p.305。

(74) *LGPN*, III.A, Ῥοῦφα, [1997] p.385。

(75) *LGPN*, III.A, Χίλα, [1997] p.476。

(76) *OCD*^{3} [1996], names, personal, Roman, 9. Names of foreigners, slaves, and freedmen, p.1025。

(77) *OCD*^{3} [1996], names, personal, Roman, 7. Women's names, p.1025; ケッピー［2006］25頁。

(78) 以上、オスティアの名門について、Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。

(79) 中野『プリニウス博物誌』１巻、444頁。

(80) 以上、セイウス家について、Zevi [2004.1] p.19, n.20; Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。

（81） Zevi [2004.1] p.22-23。

（82） Cébeillac-Gervasoni et al. [2010] p.129。

（83） ヴェーバー［2011］、女性の仕事、294頁。

（84） ヴェーバー［2011］、女性の仕事、291頁。

（85） レオン［2009］、美容師 Ornatrix、38頁；ヴェーバー［2011］、髪型、112頁；ヴェーバー［2011］、理髪師、540頁。

（86） レオン［2009］、美容師 Ornatrix、39頁。

（87） レオン［2009］、美容師 Ornatrix、38-39頁；水谷『羅和辞典』、ornatrix「着付けや化粧を手伝う女奴隷」、443頁。

（88） 以上、毛染め剤、漂白剤、リンス、香水、フケ止め、薄毛治療、エクステ、ウィッグ、爪を切る、仕事時間について、レオン［2009］、美容師 Ornatrix、38-39頁；ヴェーバー［2011］、理髪師、540頁。

（89） 以上、髪型について、レオン［2009］、美容師 Ornatrix、38頁；ヴェーバー［2011］、髪型、112-113頁。

（90） 以上、体罰、チップについて、レオン［2009］、美容師 Ornatrix、39頁；ヴェーバー［2011］、髪型、112-113頁。

（91） Kolb / Campedelli [2005] p.136-137。

（92） 以上、同職組合について、*DNP*, Bd.3 [1997], Collegium, K.67; ヴェーバー［2011］、職人、288-289頁。

（広島大学大学院人間社会科学研究科）